



高木市之助全集

第五卷

講談社

高木市之助全集 第五卷

定価三八〇〇円

平家物語の論・中世の窓

昭和五十一年十月二十日 第一刷発行

著者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二・郵便番号一二二
電話・東京(〇三)九四五―一二二(大代表)
振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十一年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I

軍記物の本質 I	3
軍記物の本質 II	13
軍記文学の一つの意義	25
鎌倉室町時代文学	33
近古文学と時代精神	42
戦記物と国語教育	81
軍記——国語教材の形態的研究	108

II

平曲と平家文学	134
平家物語の論	146
平家物語の叙事詩的関連	162
平家物語	195
平家物語の造型について	207
「平家物語」のとりえ方	218
平家物語概説	232
平家物語の創造的人間像	241
平家物語の言語	253
平家物語研究史通観	259
平家物語研究をめぐって	288
平家物語の曲がり角に立って	297

平家物語——解釈と鑑賞 1ゝ6	301
-----------------	-----

III

中世心	342
中世展望——平家の窓から	348
中世の文学史的位相	367
中世文学における風土の意味	378
中世文学における英雄の類型	390
私にとって中世的なもの	402

IV

新古今集の時代環境	418
作品としての方丈記の新しい解釈	431
軍記物語	439

太平記解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・452

太平記の謎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・465

室町小歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・477

解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・永積安明……484

解題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中西達治……496

軍記物の本質 I

私はこの小稿で学問的研究ないし考察の対象としての軍記物とはどんなものであるべきかということを考えてみたい。言いかえれば本質的研究の見当をつけてみたいのである。したがって序説であり方法論の一部であらう。

第一に軍記物という用語の範囲をどういうふうにきめていくべきであるか。従来多数の文学史において軍記物、戦記、軍書等の用語はある特定の種類を指示する術語？ として慣用せられ、たとえば和歌、俳諧、謡曲、浄瑠璃、物語などと同列に並ぶを常とする、しかしてこれらの用語の多数は何らか明瞭な形式上の要件をそなえており、したがってその範囲はかなり明瞭である。もっともここに並べた項目の中でも、物語などは多少問題になるかもしれないが、もし今日一般の文学史家に了解されているように「平安朝」のいわゆるこれを「物語」の意味とすればその限界は相当にはっきりしている。これは必ずしも平安朝という時代的制限を付したからという意味ではなく、形態のうえから見てある特殊の範疇を設けることができるという意味においてである。もちろん細別上の項目、そうでなくとも、もっと小さな種類の名称などにはずいぶん曖昧なものもないではないが、上述のような総括的な名称はだいたいにおいて明瞭な範囲を持つといえよう。

ところが軍記物という名称になるとよほど趣がちがう。文学史家は多くの場合平家と太平記とをもつて軍記物を代表させ、起原変化その他の問題に関連してときに保元・平治あるいは曾我・義経記に論及するのが普通であるが、しかし軍記物一般の性質を考えるにあたって、これ以外の作品におよぶことはきわめてまれである。(一、二の例外はある。たとえば黒川真頼の『日本文学大要』(全集所収)などのように。)こうした態度は代表的のものを挙げて一般的のものを推測させようとしたもので必ずしも不当ではなく、また分量上に制限を受けている概論としてはやむをえないことと思われるのであるが、ただ私が心もとなく感ずるのは、こうした態度によって軍記物の範囲がここに限られているというふうに考えられはしないかということである。もし軍記物という一群の文学を考察してその消長のあとをたずね、その本質の動きをつかもうとするならば、範囲をこうした少数の代表的作品に限ることは、ちょうどいくつかの山嶺を眺めることによってこの山嶺にまで盛りあがった山岳自体の質量^{マッス}を把握しようとするにひとしい不自由と不自然がある。のみならず軍記物という言葉は旧来の慣用例からしても、漠然とはしているがもっと範囲の広いものである。日本百科大辞典の「軍記物」の条に幸田氏が、

徳川時代に出でたる小説の一種、合戦闘争の事を興味あるやうに記したるものにして、虚実相半し空想と実事との中間の産物たるものとす。源平盛衰記・太平記等に淵源したる元禄宝永頃の馬場信意が作、義経勲功記・義仲勲功記・義貞勲功記の類より、降つて文化の絵本楠公記其後の豊臣勲功記の読本に至るまでみな之を軍記物と称し、通俗三国志・漢楚軍談等も亦此類に属す。此

類の書は徳川時代の小説に於ける脊髄骨たる観ありしが徳川氏の衰ふると共に漸く衰へて明治に至りて全く亡びたるが如し。

と説明しているのは、今日の文学史上の用例からすればだいたいよくいちがっているように見えるけれども、かえってこれがこの語の世間語としての、以前からの慣用的意味に近いものである。少なくとも軍記物という名称は通常そこまで延びていたのである。

つぎにまた、軍記物の範囲を文字どおりに解釈して（『言泉』や『大日本国語辞典』のように）いわゆる戦争文学の全般にいきわたらせるとすることも妥当ではない。それはまず用語として不当である。すでに或る特定の意味と語感とを持っている言葉を拉し来たって、これを是正するという範囲を越えて全然新しい概念に冠らせるといふことはいたずらに考察を混乱させるゆえんであって、そうした範疇には全然別個の名称（たとえば戦争文学でもけっこうであらう）を付すべきである。それにこうした範疇を設けること自身が考えものである。これはよくある「国文学にあらわれた何々（たとえば戦争）」という種類の研究において往々に見受けられる興味本位の範疇、換言すれば内容に対してたいした必然性のない範疇を設けることになり、多少便利ではあっても学問上から見てもそれは決して意味のあることではない。こうした範囲へ、上は「たゞなめていなさの山の」あたりから下は『日露戦争実記』『肉弾』あたりまでを包括した姿は、動物園でよく見るあの水禽類が雑然ととびまわっている大きな金網、あれ以上のものではあるまい。これを要するに軍記物といえは平家・太平記等四、五の作品に限るようには心得る傾向も非、かといって一躍その範囲をあらゆる戦争ないし争闘の文学に

まで拈げるのも当たらないことになる。

それなら軍記物の範圍はいかに定むべきであるか。先に世間語としての旧来の慣用例に言及したが、これは言語そのものの性質上、たとえ学問上の用語の範圍を決定する場合にもけっして無視してはならないものである。一般に文学批判上の用語は新造語でない限り、(そうしてなるべくはそうでないことを私はまた望む)その用語の根底にはつねに世間語としての慣用的意味が流れているべきであり、またそれは批判が深まれば深まるほど、考察がいわゆる専門的になればなるほどいっそう必要なことであろう。もっとも一方において、こうした世間的の慣用例をそのまま学問上の用語の意味としてしまうこともまたもちろん危険かつ無謀である。そこには必然に或る嚴重な検討とそれによる訂正なり変更なりがある。ここに最大の難点があるのである。軍記物の場合でも一方においてこの言葉の旧来の慣用例を顧慮しなければならぬと同時に、他方において嚴密にこれを検討是正してそこにこうした考察の対象としての軍記物の範圍を決定しなければならぬ。しかもこの検討なり訂正なりをする規準となるものは必然に軍記自体の特質であることを予想せしめるから、したがってこの問題の考察はいわゆる循環論法に陥るの危険をおかしながら、内容(特質)と名称(範圍)との間を交互にたどらなければならぬこととなり、そこに二重の困難を覚悟しなければならぬ。こう考えてくれば軍記物という用語範圍を設定することは単なる用語の末梢的詮索ではなく、本質を考察する過程の中へ相当に深い根を張る問題なのである。

つぎに軍記物の本質を考察するためにどんな方法が可能であり、また適切であろうか。一般に文学史的方法論は今日極端に錯雜紛糾し、ほとんど帰趨を知らない状態にあるのであるが、中で比較的簡

単によくまとめ要領を得ていると考えられる。W. Mahrholz 氏の小著 *Literargeschichte u. Literarwissenschaft* (1923) に従えば、文学史の方法として三つの起点を考えることが可能である。すなわち、(1)人から、(2)作品から、(3)文化関係から発足することができる。(1)の立場は最も普通であって文学史はこの方法からすれば人と代^{ゲネチオン}の系列として説明される。この種の考察の最も純粋な型はすなわち伝である。(2)の立場すなわち作品を標準とするもので、これらの作品の取材・内容・形態および影響に即し、したがってまたこれらの方面を他の作品のそれと史的に関係づけるのである。(3)の立場からすれば文化史としての文学史の存在もまた可能である。ある民族の文学は明らかに該民族の一般文化の本質的成分であり、したがって文学史を一般文化史として建てていくこともできるわけである。この場合において考察の対象となるものは文化の表現としての文学であるから、ここでは文学はもはや本来の価値を失って一般文化史の素材となってしまうというのである。

以上はM氏の説明の輪郭である。総括分類の手法には何ら警拔な点は認められないけれども、だいたいにおいて文学史的方法論としてすべての場合を覆い、またこれを穩健妥当に分類しているようである。真に氏に傾聴すべき点はしかしながら、むしろつきにくるこの三方面に対する考查判断である。しかしてそれは軍記物に対する方法論としてもきわめて適切なものである。すなわちこの三つの方法は文学に対する史家の異なった見地に応じてそれぞれ意義を有するものであり、したがって文化的ならびに評伝的討究も文学史的方法としてきわめて有益かつ必須であるが、しかも三者の中で最も重要なものはやはり作品を中心とする(2)の方法で素材・内容・形態の歴史、換言すれば文体系史(Stilgeschichte)となければならぬというのである。氏はさらに上述素材(Stoff)内容(Gehalt)な

らびに形態 (Form) の三つが、(2)の方法すなわち作品自体の考察のうえにいかに関連不離のものであるかを考え、素材の世界・思想 (内容) の世界ならびに形態の世界は相関的のもので、一つの世界におけるすべての変化はつねに他の二つの世界における変化を導くもので、この変化を特性づけ相互の関係においてこれを認識し、そうしてこれをその根本的交渉において説明すること、これこそ文学史本来の仕事であると論じている。要するに氏は三つの方法にそれぞれ意義を認めると同時に、文学史本来の研究としてはあくまでも (2) すなわち作品本位の方法を推そうとするのである。

以上M氏の所説は、紛糾混乱、学徒をしていたずらに迷路に彷徨せしめている現時の文学史的方法論に対してきわめて簡単に断案をくだしたものであって、したがって吾人を益するところもまた大である。しかし私がここにくだくだしく紹介したのはこうした一般文学史の方法論としてこの見解を推奨しようとするためではない。(この点からすれば私は氏の所説に対しなお多少の疑いを存するものであるが、余談にわたるから割愛する。) ただ上述のように、軍記物研究の方法論を考えるに当たっては氏のこの見解が最も剴切であると信ずるからである。

軍記物の考察に上述三つの方法はたして可能であろうか。三者のうち最も不適当なのは (1) すなわち作家本位の方法でなければならぬ。もっともそう考える理由は必ずしも軍記物個々の作品の作者が不明であるということではない。もしこうした意味からすれば今後も根氣よく諸家の目録類を詮索することによって幾多の小島法師を発見することもできるかもしれない、そうでなくとも後期ことに徳川期となればすでに作者の判明しているものも少なくないし、さらにまた、作者の姓名は不明であつてもその閥歴性格等の幾分は推測される場合もあり、したがってこれらの人々を作家あるいは人として

考察し、その間の交渉なり伝統なりをたずねて個人としてまたは一群の作家としての面影を彷彿させ、そこに軍記物の消長をうかがうことは少なくとも不可能と断じ去ることはできないわけである。私が軍記物にこの方法を探ることの不適当を考えるのは必ずしもこうした意味からではなく、むしろ作者が誰であろうとも、軍記物をおして見た彼らのかげがまことにうすいという意味においてである。

いま一例として軍記物の中の代表的作品をとって他の種類の文学の同様に代表的のものと比較してみるに、たとえば源氏・近松などにおいて、われわれは作の背後に常に作者の衣ずれの音を聴くけれども平家・太平記においてこれを聴くことはきわめてまれである。流布本平家物語に見える、祇園精舎の鐘の声ないし、さるほどに寿永も何年になりけりといった調子の甘美な無常観なども、ちょっと作者の声のように聞こえるけれども、よくよく耳をそばだてればそれは作者の声というよりはむしろ時代そのものの無常観なり喟嘆なりが作者をおして聞こえているにすぎないことを知るであろう。作者のかげがうすいということはもちろん軍記物に限ったことではない。ただ軍記物のように主題が事件であるためにそれだけ客観性を帯び、また一方に民族的（個人的に対していう）性質を多量に含んでいる場合においては特に顕著に看取せられる事実である。軍記物はこうした意味において(1)すなわち作家本位の方法にはすこぶる不向きだといわなければならぬ。

つぎに軍記物を(3)すなわち一般文化の本質的成分として文化史的に考察する方法を見るに、これはもちろん可能であるばかりでなく、個々の作品に対しては従来しばしば試みられ相当地に効果を挙げた方法である。観方によっては軍記物が(1)の方法に適当しないだけそれだけこの方法に向くともいえよう。けだし作者のかげがうすいことは、その内容となつてゐる時代思想なり文化なりが作者に

よってすこぶるすなおに外界から作品へ反射投影しているということではなければならぬ。したがってこの種の文学は他に比べて文化史的考察の材料としていっそう直接また適切であるということになる。泰西の文学史的研究において種々の点でわが軍記物に相応する叙事詩（epic poetry）の考察がしばしばこの方法によっているのをはじめとして、わが国においても津田左右吉氏の研究、平泉澄氏の研究等もまたこの方法に対する好個の参考材料である。しかしながらここに考えなければならぬことは、こうした方法の前にわが軍記物は——M氏の説明しているように——それ自身の価値を失って、文化あるいはその成分に奉仕する単なる材料と化してしまうことである。換言すればこの方法においては考察の対象はもはや軍記物自体ではなく、その内容となっている文化またはその一成分にすぎない。したがってこの方法が採られている限りは考察はおそらく常に軍記物自体の本質に触れることはなからうと思われるのである。といって私はこの方法を拒否しようとするのではない。一般に文化学の材料として文藝にしくはなく、文藝の中でもまっとうから全人生を表現しようとする叙事詩的文学にしくはない。しかのみならずこの方法による優秀な研究は、たとえ間接であっても本質の闡明のうえに種々のヒントを与えまた多大の貢献をなすものであるから、これを文学の側から眺めてもすこぶる貴重な研究であるばかりでなく、むしろ当然欠くべからざるものというべきである。ただし軍記物自体の本質をつかもうとする場合にはもっと直接の方法、換言すれば文学自体をもって考察の対象とする方法があって、この方法による考察が軍記物に関するあらゆる研究考察を統率しなければならぬのではないか。そうして(2)すなわち作品本位の方法がすなわちこの方法ではなからうか。

この方法に従えば、軍記物という一群の文学それ自体を直接の対象としこの対象を三重一体なる素